

日本イギリス哲学会 第55回 関西部会例会

日 時：2016年12月17日（土）14：00～17：15

場 所：京都大学吉田キャンパス 法経済学部東館 地階 みずほホール

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 1：14：00～15：30（討論を含む）

報 告 者：大槻 晃右（同志社大学大学院 文学研究科博士課程（後期課程））

題 目：知覚の関係と関係の知覚

—ヒューム『人間本性論』における関係的認識の構造—

報 告 2：15：45～17：15（討論を含む）

報 告 者：伊勢 俊彦（立命館大学 文学部）

題 目：社会的世界における因果—ヒュームの所有論を手がかりに—

なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、来年度7月の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

久米 暁（関西学院大学、exkume@kwansei.ac.jp）

竹澤 祐丈（京都大学、Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp）

<会場案内>

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学吉田キャンパス本部構内



<日本イギリス哲学会 第55回関西西部会例会 報告要旨>

報告 1：知覚の関係と関係の知覚

—ヒューム『人間本性論』における関係的認識の構造—

大槻 晃右

本報告の目的は、デイヴィッド・ヒューム(David Hume, 1711-76)の『人間本性論』(*A Treatise of Human Nature*, 1739-40)で関係の認識が備えている知覚としての構造を解明するところにある。

従来、多くの解釈者たちは、知覚に関するヒュームの理論を、関係の把握を十全には扱えない体系として論難してきた。たとえば、ウィリアム・ジェイムズによれば、かれが唱道する「根本的経験論」の独自性は、ヒュームの経験論とは違って関係それ自体の経験を認めるところにある。なるほど、近年では、空間と時間の認知を諸知覚の配列とか現れる仕方とかの捕捉に基づけるヒュームの文言に依拠して、関係的認識を、知覚についてヒュームが提起している着想のなかに取り込もうとする研究もある。とはいえ、この場合でも、そうした配列ないし仕方が知覚としてどのような身分を持つのか、その位置付けが明確になっているとはいいがたい。

しかし、他方で、『人間本性論』の論述を辿ってみれば、関係の知覚が果たしている役割は無視できない。因果的推理だけに限ってみても、それが実現するためには、原因と結果の空間的および時間的な近接の関係と、経験した諸事例間に成り立つ類似性との関係を認知していなければならない。このように、『人間本性論』の様々な局面で、ヒュームは関係の観取を前提にして立論を組み立てている。したがって、ヒュームにあって関係の知覚がいかにして可能であるのか、その究明を等閑に付することはできないのである。

本報告では、ヒュームが『人間本性論』の中で関係の知覚をどのように捉えているのか、かれの視点を明らかにし、関係の知覚が存立する機構を析出させたい。まず、空間的に関係している諸知覚と、空間的關係についての知覚とを重ね合わせるヒュームの言説を足掛かりに、関係項としての諸知覚と、成立している当の關係との關係を明確にする。そのうえで、抽象觀念および「理性の區別」に関するヒュームの考え方を踏まえて、關係の中にある諸知覚の把握がどのようにして關係それ自体の理解に結び付くのか、その連關を捕捉する。これらを踏まえて、知覚に関するヒュームの理論の枠内で關係の知覚が占める布置を確定する。

(同志社大学大学院 文学研究科 博士課程 (後期課程))

報告 2 : 社会的世界における因果—ヒュームの所有論を手がかりに—

伊勢 俊彦

ヒュームは、『人間本性論』で誇りの情念の原因としての「富と所有」について論ずる際、所有が因果性的一种であり、なおかつ、誇りの情念を引き起こす人物（誇りの情念の対象）と対象（誇りの情念の原因）との関係のうち最も密接なものと見なされると言う。しかし、所有は、対象間の可感的関係（近接と継起）の反復した生起という、因果性の必要条件を満たさないように見える。すでに情念論の文脈で、所有の与える力は、それが行使される蓋然性がなくても、想像によって快を与えると述べられ、力とその行使は不可分であるという正確な哲学的見解に反する事例とされる。また、正義論の文脈では、所有がどこで始まりどこで終わるのか定めるのが多くの場合不可能であることや、所有の観念の不完全性が指摘される。これらの問題にもかかわらず所有が因果性的一种として理解されるべきであるとすれば、因果性のとらえ方自体を見直す必要があるだろう。報告では、こうした問題を入りに、社会的世界における因果性の把握について考察を試みる。

(立命館大学文学部)